



特集

1.17 阪神・淡路大震災20年

人と防災未来センターでは、2014年11月7日(金)から2015年6月28日(日)まで、特別企画展「1.17 阪神・淡路大震災20年」を開催しています。西館2階・東館2・3階のセンター企画展「伝えよう 未来へ 世界へ」と連動して、西館5階資料室では、「震災資料をつなぐー収集・保存の軌跡ー」と題した企画展がはじまりました。

資料室企画展

「震災資料をつなぐー収集・保存の軌跡ー」の開催にあたって

人と防災未来センター資料室では、震災や防災に関する資料を継続的に収集・蓄積するとともに、市民にわかりやすいかたちでの防災情報の整理・発信を行っています。阪神・淡路大震災の発生後、さまざまな人びとの生活のなかで生まれ、残された“震災資料”はいわば被災地の記録の集積です。センターに集められた一次資料は、分類・公開基準や、保存・利活用の方策についての検討を重ね、震災の教訓を後世に伝えるため、原則的に公開することが定められ、資料室で保存・公開しています。

〈震災資料をつなぐ〉から〈震災資料がつなぐ〇〇〉へ

阪神・淡路大震災から20年が経ったいま、あらためて1995年1月17日を振り返るためには、当時を想起させるモノや文書や映像といった“震災資料”が手掛かりになります。震災資料には、被災地の生活のなかで使われたものや、日々の状況を記録した手書きの文書や貼紙、崩壊したまちとその復興過程をうった写真・映像など、さまざまなものが含まれています。

今回の資料室企画展では、これら震災資料が、甚大な被害を受けた被災地において、多くの人々や団体によって試行錯誤を重ねながら集められた経緯や、センターに所蔵された震災資料が持つ当時のエピソード、そして現在・未来に向けていかなる形で記憶と記録を伝えられるのか、といった点に着目しました。

この20年間、残されつなげてきた象徴的とされる震災資料についても、収集事業で定められたマニュアルとあわせて示しました。よく知られる「5時46分で止まった時計」は数多くご寄贈いただいたモノ資料の一つですが、その一つひとつが異なる被災体験をしたものです。センターには、資料をご提供くださったみなさんから体験や想いを聞きとった、貴重な記録も残されています。こうした震災資料の背景からは、当時の地域における人と人とのつながりや、復旧・復興過程で顕在化したさまざまな問題が読み取れます。

また、当センター所蔵の“震災資料”には、当時を想起させるトリガーに止まらない意義があります。もっとも注目すべきは、災害後の地域における民間資料群である、という点です。生活すらままならない困難な状況で、立場的義務がないにもかかわらず、未曾有の経験を何らかのかたちで残そうと考えた人びとの記録が約19万点も集まった。このこと自体も、1.17を物語るものと言えるでしょう。

そして「震災資料をつなぐ」ことに注力してきたセンター開設からシステム構築の時期を経て、これからは「震災資料がつなぐ〇〇」をさらに考えることが必要でしょう。集められ・残された資料によって、「ふりかえる」「語り継ぐ」「学ぶ」といった行為が可能となっていることを再確認したうえで、そこから何を読み解き、つなぐのか、解釈の可能性を模索し続けなければなりません。

私たちもまた、資料から得られる知見の利活用を進められるようにと情報発信の方途を探りながら、相談業務・展示の企画・ニューズペーパーの発行などに取り組んでいます。このほか、県内では震災20年をふりかえるイベントが、さまざまな団体によって開催されていますが、当室所蔵の写真資料は各所でパネルとして展示に用いられました。

資料室では、この20年という節目を、“震災資料”という記録を残そうとした動きから、残された記録をつなぎ続ける場としてのセンターや資料室が、これからどのように機能し得るかを見つめ直すタイミングと捉えました。このたびの、そしてこれからの、所蔵資料を活用したさまざまな取り組みや媒体が、どこかでみなさまの目に触れ、1.17とそれ以前／後の地域への理解や、いつか起こる災害への想像力を養う一助になればと願っています。

(震災資料専門員・村上しほり)



▲ センター企画展
「伝えよう未来へ世界へ」



▲ 資料室企画展
「震災資料をつなぐー収集・保存の軌跡ー」



中面では、センター企画展の震災資料を用いたパートと、資料室企画展の内容について、ご紹介します。



part1の「あらためて振り返る1995.1.17 LOOKING BACK：17 JANUARY 1995」では、被災地の20年のあゆみをあらためて見つめ直しました。ここでは、震災の経験と教訓を、震災を知らない世代にも伝えるために、震災資料や地図、3D映像、データ、年表など多様な切り口での展示が行われています。ここには、資料室所蔵の震災資料の実物や報告書から得られる知見も活かされています。

part2の「1.17と3.11ふたつの災害の特性を知るLEARNING ABOUT THE DIFFERENT ASPECTS OF THE 2 DISASTERS ON 1.17 AND 3.11」では、ふたつの災害の各種データがまとめられています。
part3の「20XX.X.X 将来の巨大地震に備えるPREPARING FOR COMING MASSIVE EARTHQUAKE」では、首都直下地震や南海トラフ巨大地震などの被害想定や、災害に備えるための新しい取組みなどを紹介しています。

人と防災未来センター資料室による2014年度企画展、「震災資料をつなぐー収集・保存の軌跡ー」では、センター企画展と異なる視点からの「ふりかえり」を目指しました。震災資料を収集・保存し、つないできた軌跡と現状、そして資料を引き継ぐための活用にも取り組む資料室について「震災資料をつなぐ」つながれた震災資料」という、ふたつのパースペクティブでまなずす試みです。
資料室では、集められ、残されてきた震災資料をどのように伝えるか、方途を模索し続けています。

20年という節目を迎えるにあたって、今年度は被災地で震災当時をふりかえるさまざまな展示やイベントが開催されています。当室にも写真や映像資料の貸出依頼が多く寄せられました。
いまや阪神・淡路大震災の発生当時には生まれていない世代が大人になり、子どもたちの記憶にある大災害は2011年の東日本大震災です。こうした現状のなか、県内の防災学習においても、1.17当時の状況を映した記録映像は、すでに自明のものではなくなっていると感じます。私たちにできることを、考え続けていきたいものです。
みなさまとの対話を通じて、日々、認識の広がっていく資料室の変化を映しだす展示となりました。以下では、その一部をご紹介します。



センター西館2階part1の一部



以下では、特別企画展part1のなかで、No.3「資料室収蔵品で知る当時の空気、その後の20年」に用いられている震災資料をご紹介します。

No.3 資料室収蔵品で知る 当時の空気、その後の20年

Learning from museum artifacts
Feelings at the time and over the following 20 years

このコーナーでは、資料室に収蔵される一次資料の原物を展示しています。寄付されたタオルをぎょうの形に仕上げた手ふきタオルの「まけないぞう」や、さまざまなミュージシャンがカバーして語り継がれている「しあわせ運べるように」のCDや、仮設住宅の各戸を彩った手作り表札など、1.17を想起させる象徴的な震災資料を選んでいきます。



No.3の展示ブース



⑥復興元気村パラル店内案内図
提供者：久二塚地区震災復興まちづくり協議会 (3400117)

⑦「ガッツや KOBE」パンダナ
提供者：春風会 (1400393)



⑧オリックス・ブルーウェーブのユニフォーム
提供者：オリックス野球クラブ (3400171)

⑨「しあわせ運べるように」のCD
資料室では、3.11後に福島県二本松市立杉田小学校合唱部が歌った「しあわせ運べるように」のCDも所蔵しています。



⑩多言語CD「災害時多言語音声素材集 Disaster management Audio Materials for Community Radio Broadcasting」
JICA 兵庫国際防災研修センター (5-B/ ポウ/32787)

⑪「まけないぞう」セット
提供者：被災地 NGO 協働センター (1400224)



⑫手作り表札
提供者：長岡照子 (西宮・地域たすけあいネットワーク) (395)

活用の方途を探る。

資料室では、震災資料の収集・保存とあわせて、その知見をこれからの防災・減災に役立てるための情報発信にも積極的に取り組んでいます。資料室設置時から毎年続けてきた展示や、「資料室ニュース」の発行のほかにも、最近行った3つの試みについてご紹介いたします。

■トライやるウィークと展示

11月のトライやるウィークでは、12-13日に歌敷中学校、13-14日に葦合中学校の2年生を受入れました。歌敷中学校には二次資料の図書で特集コーナーを、葦合中学校には一次資料の写真と「被災度別建物分布図」を用いて三宮地域を対象に「身近な街の被害～僕らが見た1.17のキョウ～」を作成してもらいました。
これらも震災資料の活用の一例として、資料室にて展示しています。

■「資料室はてな」「資料室ひろば」発行スタート

2014年6月より、資料室でよく話題になる・質問されるテーマについてまとめた「資料室はてな」と、最近の取組みを紹介する「資料室ひろば」の2つのニュースペーパーを発行しはじめました。不定期ですが、現在、「はてな」は3号、「ひろば」は2号まで発行しています。こちらもあわせてよろしくお願ひします。



■ぼうさい出前授業 2014年12月2日(火)、3日(水)

徳島県海陽町の穴喰中学校、兵庫県南あわじ市の南淡中学校で毎日新聞社と共同企画のぼうさい出前授業を実施しました。
人と防災未来センター資料室からは、矢守上級研究員と岸本震災資料専門員・村上震災資料専門員が、防災ゲームの「クロスロード」を用いた授業を行いました。クロスロードでは、災害時の困難な状況をシミュレーションしてYesかNoかを決断し、その理由を話し合います。1.17や3.11発災時の状況を例とした正解のない問いに自分はどう対応するか、あらかじめ考え、他者の意見を聞くことで、各人が「想定」の幅を広げ、「想定外」の事態を減らす、心と頭の備えが大切であることを伝えました。



震災資料の メッセージ

Message from Earthquake Materials



資料で、あのときをのぞいてみよう

1995 - 2015

2013年度より、3階の展示フロアにガラスケースを設置し、テーマに沿って一次資料を展示しています。昨年度「1.17の衝撃」に替わり、2014年度は「資料で、あのときをのぞいてみよう」とし、当時は日用品であったものが、阪神・淡路大震災を経て震災資料となったことに着目しました。一見、資料というイメージに結びつかないものでも、震災の記憶や想いが刻まれて、資料として保存されることになったものも多数あります。資料を扱っているときにふと訪れる、それぞれの資料がもつ「あのとき」を、そっとのぞきこんでいるような瞬間。過去と未来がつながる現在、震災から20年を迎える今への想いを込めました。

西館3F展示「震災資料のメッセージ」開催中

2か月ごとに展示を替え、全部で4つの資料を紹介し、第1回目のポリ容器は、震災当時、三重県在住の女性が被災地の男性へと水を運んだ時に使われました。当時の水も、そのまま容器に残されています。第2回目の自転車は、当時小学生だった兄弟が、仮設で困っている人たちのために募金活動しながら日本一周をしたときに使われたものです。兄弟をモデルに書かれた児童書「走るんや!」もあわせて展示しました。

会期中には、それぞれの資料をご寄贈くださった方がご家族と一緒に来館されました。ポリ容器の寄贈者ご本人と奥様、そしてこの出来事をきっかけにご結婚されたお二人とお子様にご来館いただきました。自転車の展示では、お兄さんであるご本人と奥様、一緒に日本一周をしたお母様、チャレンジを見守り続けた報道局の方もお子様と一緒に、ご覧いただきました。



▲ ポリ容器の展示と寄贈者の皆さま

10年以上の空白をこえて資料と対面した皆さまは、笑顔で当時の出来事を話されていました。人と人、出来事、時間をつないでいる「あのとき」の様子が、私たちにも少しだけ見えたような気がしました。

センターへご来館の際は、ぜひ西館3Fの展示にもご注目ください。▲ 現在展示中の自転車と寄贈者の皆さま



展示 スケジュール

2014年9月末
～2015年5月末

9月30日～11月30日	「被災地へ水を運んだポリ容器」(ポリ容器と当時の水)
12月2日～2月1日	「日本一周した自転車」(ロードバイク)
2月2日～3月末	「当時活躍した機械」(新聞社のFAX)
4月～5月末	「音の記録」(FM番組を収録したテープ)

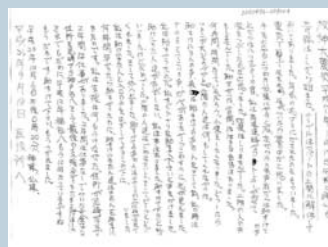
資料紹介

奇跡的に助かった命“体験を伝えたい” 福島重行氏資料

福島氏は、当時、神戸市東灘区深江の2階建てアパートに住んでいました。震災で倒壊した阪神高速道路のすぐ脇にあるアパートで、住んでいた1階部分がつぶれて生き埋めになり、4時間ほど気を失っていたそうです。

氏は、たまたまアパートの別の部屋の住人からもらった、解体していたテーブルの天板と壁に守られていました。目覚めたときには狭い隙間にて、それがテーブルと壁の間とはわからず、お墓の中にいるのかと思ったそうです。隣の部屋から助けを求める声が聞こえてきたが、その声もだんだん小さく、聞こえなくなっていき、助けがきたのはお昼頃でした。住人のひとりの勤務先だった水道屋の従業員が助けに来てくれましたが、1階の5部屋の住人のうち、助かったのは福島氏だけでした。震災後、2年間は近隣であった深江北町の仮設で暮らしたのちに、立ち退くこととなって兵庫区に移られました。

氏は、阪神・淡路大震災で自らが奇蹟的に生き残った体験を伝えたいと思われ、阪神高速が倒壊した様子を伝える新聞記事の切り抜きや写真を集めておられました。これらの資料を、2012年から継続的に、資料室にご寄贈いただいています。このたび、深江南町から深江北町にかけて、震災直後の写真と2年後2月の雪の日の写真や、被災時生き埋めになったときや救出されたときの状況を説明した文章と図、新聞の切り抜きをいただきました。過酷な体験をなさったからこそ、自らの被災した地域や当時の状況を伝えたいという強い思いが、ご寄贈くださった資料からも感じられます。



▲ 被災から救出に至る状況についての手記



▲ 新聞の切り抜きと現地の写真



震災資料をお持ちの方に

人と防災未来センターでは、現在も震災資料の収集を続けています。震災後、すぐには手放せなかったものの、震災の出来事を伝えるために活用したいとお考えの方は、ぜひ一度資料室までご相談ください。

(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
阪神・淡路大震災記念

人と防災未来センター 資料室(西館5階)

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

TEL.078-262-5058 FAX.078-262-5062

HPアドレス <http://www.dri.ne.jp>

開室時間 9:30～17:30(展示施設とは時間が異なりますので、ご注意ください)

閉室日 毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は翌日) 12月29日～1月3日

資料室は無料で
ご利用いただけます